

## ベートーベンの音楽とその教材性についての一考察

—— 第5交響曲と第9交響曲の鑑賞学習を視点として ——

藤原正博

### I はじめに

世に様々な種類の音楽が氾濫している現代は、学校教育においても音楽の正に教育に値するそのあり方と方向が問われている時であり、そこで果たす音楽の役割とその教育的価値についての見解も益々多岐にわたる様相を呈している。一方、音楽の代名詞のように広く知られたベートーベンは一時のような崇拜的な煽りは冷めたとは言え、なお、国を越え、時代を越えて広く音楽文化の底辺を支えている。戦後、我が国の小・中学校学習指導要領に示された共通共材の中から彼の音楽が今だ消えたことはない。ベートーベン崇拜の正否はさて置き、少なくとも“なぜベートーベンなのか”を今一度見直してみることで、今日音楽教育が模索している音楽の本質的な価値の一端に触れることができるのかも知れない。あるいは、その何らかの手がかりを見出せるのかも知れないという期待をもち、さらに個人的な音楽体験をも絡めて次のような仮説を設けてみた。

『ベートーベンの作品の中に息づく音楽の本質は学習者の音楽に対する感性とその素地を、音楽教育がねらうより深化、高揚の方向へ根本から変容させる力をもっている。』

この考え方に立って、ベートーベンと上記のように、ありとあらゆる音楽をほしいままにしている現代っ子たちとを対決させてみることにした。

### II ベートーベンの音楽について

現代の日本における様々なベートーベン観を、指揮者や評論家の随筆の中から重立った部分を拾い出しながら、その人間像と芸術的特徴を浮き彫りにしてみたい。

指揮者でもありまた音楽評論家で名高い宇野功芳氏は著書「ベートーベンの生涯と音楽」の中で次のように語っている。

「往年の名指揮者ブルーノ・ワルターは次のように述べている。『ベートーベンの人並みはずれた情熱を表現するには、指揮者にベートーベンと同じように激しい情熱がなければならない。そうでないとベートーベンの音楽は、指揮者の低い水準にまで下がってしまう。』ほんとうにこの言葉のとおりである。同様にベートーベンの苦しさや優しさを表現するには、指揮者に同じ量の優しさや苦しみの心が必要なのだ。……」

また同じく、

「近頃はベートーベンをスマートに、クールに演奏するのが流行している。汗くさいベートーベンはダサい、洗練されたベートーベンがナウい、と考えているのだ。そのことによって聴衆がベートーベンはつまらないと誤解し、ベートーベンから離れてゆくことに気がつかないのだ。……ベートーベンの魅力！ それは申すまでもなく、あふれんばかりの人間くささである。……『苦悩を克

服して歓喜へ』これがベートーベンの音楽の主題だったのである。……」

さらに続けて、

「……最後の特徴は人一倍の優しさであろう。とかくベートーベンというと、なりふり構わぬ服装をし、髪をぼうぼうとのぼし、思いきり洗面をつくった、とっつきにくい人物に思われがちである。そういう面はたしかにあるが、彼の内面は人恋しさに満ちていた。……」

音楽評論家、黒田恭一氏は共同通信社発行の随筆集「私のベートーベン」の中で次のように述べている。

「……ベートーベンの音楽の聴き手が、すごいなと思ひ、さらにはちょっとかなわないという気持ちになるのは、それが徹底した表現だからだ。まあ、どうぞ、ご随意になさって下さい——とはついにベートーベンの音楽は、言わない。……」

同じく、

「ベートーベンの音楽をきくのは、勝つか負けるかの、つまり一種の勝負のようなものだ。きいてはじきとばされないためには、足をしっかり地につけて、腰をおとし気味にしていなければならぬ。……ベートーベンの音楽は、ついににげない表情をしない。それはいつだって、ベートーベンという、西洋の音楽史上ほかに例をみないほどの個性を通過してきたことを思いださせる。」

同じ著書の中に、元慶応義塾大学教授、鍵谷幸信氏の次のようなベートーベン観もある。

「世間で西欧音楽といえは、まず誰をさておいてもベートーベン、という公式論理あるいは一般教義に反発したくなってくるのだ。」

「……ベートーベンという人の作った音楽は、押しつけがましいのである。さあ、これから偉大な音楽が始まるぞ。全員傾聴ッ、となんだか号令をかけられているみたいで、はなはだ圧迫的なのだ。……」

「……多くのベートーベン像、ベートーベンの顔の画であるが、いずれもいかつく、よくいえば意志の人という印象を受ける。なんだか怠け者を叱咤激励しつづけている顔で、ほくみたくない怠け者には不向きだ。……」

このようにベートーベンの音楽については、ベートーベンという人物の人格や生き方がその作品の芸術性にとりわけ深く結びつき、その音楽がその人そのものであるかのごとき感を抱かせるほどのものであることがうかがえる。

### III 研究の対象と方法

平成2年度本校第2学年並びに第3学年の計250名を対象とした、交響曲第5番ハ短調作品67、交響曲第9番ニ短調作品125の鑑賞学習での感想を分析してみた。鑑賞に用いた演奏は、第5交響曲はレコード、ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮：ベルリンフィルハーモニー管弦楽団、レーザーディスクはオットマール・スィトナー指揮：ベルリン放送管弦楽団、第9交響曲には、レーザーディスクとしてヴォルガング・サヴァリッシュ指揮：チェコフィルハーモニー管弦楽団である。尚、第2学年については、教科書共通教材として一学期7月に実施した第5交響曲の鑑賞と深化発展として12月に扱った第9交響曲の鑑賞学習の結果であり、第3学年については授業時数上第9交響曲

のみについでの結果である。

〔授業の展開にあたっての留意事項〕

交響曲第5番ハ短調作品67	交響曲第9番二短調作品125
ア. ベートーベンの作曲原理について簡単に理解させたこと。	ア. 第4楽章の主題を原語唱による歌唱教材として扱い、鑑賞の導入として用いたこと。
イ. 第一楽章を中心にソナタ形式や曲の構成に注目させたこと。	イ. 復習として、資料を用いてベートーベンの生涯や人間像を確認したこと。
ウ. ベートーベンの生涯について分かり安い資料を用いて説明し、人間像を感じとらせたこと。	ウ. 生徒の集中力等を考え合せ、鑑賞は第4楽章を中心とし、第1～第3楽章は冒頭部分の2～3分の鑑賞にとどめたこと。
エ. 曲趣の異なるベートーベンの他の作品や他の作曲家の作品と比較させたこと。	エ. 第4楽章に使われているシラーの詩「歓喜に寄す」の口語訳を資料によって確認したこと。

#### Ⅳ 生徒の感性がとらえたベートーベン

生徒の感想の内容を、前記した3人の評論家の型に対応させ、宇野功芳氏の型をベートーベン尊崇型としてA、黒田恭一氏型を客観視型としてB、鍵谷幸信氏のような型を敬遠型としてC、の3類型に分類し、その代表的な例を紹介する。

(1) 第5交響曲のA型 (160名中112名)

秀和 (二年生男子)

音楽鑑賞カード	7月/8日(水)
曲目	交響曲第5番ハ短調 作曲家 ベートーベン 作品67
1. この曲の特徴	はげしい。かこい……
2. 全体的な感想	おもしろい。目をふさぎて、何かに いっしょけんげに生きている感じがする。 5 (↑) 3 3 1

ベートーベンの人と音楽について思ったことを書いてみましょう。

↑はげしい。かこい……  
音楽一人生その感じが、感動にうけとれる。  
(エリゼのスケッチを聴く)  
うつくしい。そしてはげしい。愛の感じがする。  
おもしろくて、夜にその音の聴こえを想像して……

靖 (二年生男子)

音楽鑑賞カード	7月18日(水)
曲目	交響曲第5番ハ短調作品67 作曲家 ベートーベン
1. この曲の特徴	非常に激しい調子の演奏。形式はソナタ形式 たつ交響曲のうち5番目の曲。
2. 全体的な感想	快いような曲で息がする暇のないように思え ます。耳を塞ぐとベートーベンの作品でないような と思わせる曲です。自然な愛したバ ートーベンの気持ちかよめるような 気がします。

ベートーベンの人と音楽について思ったことを書いてみましょう。

彼のような偉大な作曲家はもうこの世には  
ないと思いましたが、不幸が彼を襲ったか  
らあと有名な作曲家になったのかと  
思いました。もし不幸で打撃を受けた  
ら、それだけでもいいような気がします。  
ベートーベン、不幸で打撃を受けたか  
ら、それだけでもいいような気がします。  
ベートーベン、不幸で打撃を受けたか  
ら、それだけでもいいような気がします。  
ベートーベン、不幸で打撃を受けたか  
ら、それだけでもいいような気がします。





## Ⅵ 考 察

### (1) 感想文が語るもの

対象とした250名の感想文を通して、ベートーベンの音楽について表現している代表的なことばを、多い順に幾つか掲げてみると、「音楽」、「人間」、「心」、「すごい」、「すばらしい」、「表現」、「すべて」などである。そもそも、音楽に対する感性を文字や言葉で表現したものからその真相を判定するには、当然ながらそこに無理があることは承知の上で、せめてその行間から読みとれるものを考察の一つの手がかりとした。すると、文上の表現は主観的で、ぎこちなさの残るものとは言え、その内容は立派に評論家たちのそれに通ずるところがある、と捉えることができるとするのは担当者としての手前みそであろうか。

言い換えれば、これは、ベートーベンの音楽が時代や国を越え、さらに同時代に生きるあらゆる年齢層の人々の心にも深く訴える力をもっていると同時に、生徒の感性がまちがいがなくその部分を捉え、彼の音楽の訴えに正しく感応している証しと受けとめてよいのではなかろうか。

### (2) 本校音楽科の研究テーマとベートーベン

世は生涯学習の方向に動き出している。本校の教育研究はそこに自己教育力育成の意義を認め、「自ら学ぶ力」に視点を当てた研究を数年来継続している。本校の音楽科はこの「自ら学ぶ力」を“自らの意志による発散を促す自己表現の力”と捉え、これを支える視点として、①基礎・基本、②意欲・意志、③感性、の三つを掲げている。詳細は北尾倫彦監修、島根大学教育学部附属中学校著の「自ら学ぶ力を育てる学習指導」を参照していただきたいが、この「自ら学ぶ力」育成の視点である基礎・基本、意欲・意志、感性は、体験の積み重ねにより、お互いからみ合い影響し合い、混合の状態となって“学ぶ力”や“生き方”へと志向されていく。ベートーベンの音楽に対する生徒の感性は、本校音楽科の研究テーマが志向する“生き方”や“価値感”という「自ら学ぶ力」の根幹をゆさぶる重要な部分に触れていることがわかる。これも言い換えればベートーベンの音楽のしからしむるところと言うべきであろうか。このようにしてみると、かの有名なことば、『人類は、ベートーベンによって初めて“音楽”を獲得した。』との意味が朧気ながら感じとれてくるのである。

## Ⅶ お わ り に

今回の事例研究は鑑賞学習に限ったものであり、まだ仮説を実証する事例としては客観性に乏しく、考察結果をそのまま教育実践に生かしていくための具体的方途が不明確なままである。今後、これらの点を明らかにしていく方向で、継続して本研究に臨みたいと思う。

### <参考文献>

- (1) 宇野功芳著：「ベートーベンの生涯と音楽」、講談社、1990
- (2) 共同通信社編：「私のベートーベン」、P45、P69、共同通信社、1989
- (3) フルトベングラー著：「音と言葉」
- (4) 島根大学教育学部附属中学校著：「自ら学ぶ力を育てる学習指導」、東洋館、昭和63年